

社
SHA

楽
RAKU

神奈川県立川崎図書館 が所蔵する
全国有数の〈社史コレクション〉を
さらに活用していただくため、
社史の使い方や、社史の楽しさ、
社史情報などをお届けしていきます。

Vol.52

2016/02

朝の連続テレビ小説「あさが来た」で主人公のモデルとなった明治の女性実業家、広岡浅子（1849～1919年）。

京都の豪商・出水（小石川）三井家に生まれ、大阪の豪商・加島屋の広岡信五郎に嫁いでまもなく明治維新を迎えます。社会構造の大転換の中、新しい時代の波に乗り、炭鉱ビジネスを皮切りに、大同生命や加島銀行、日本女子大学などの設立に関わりました。

今回の「社楽」では、女性が表に出ることの少ない時代に企業経営者として活躍した広岡浅子にまつわる社史をひもといてみます。

【出自と気質】

広岡浅子は、1849年に京都の豪商・出水三井家に生まれました。幼少のころから、丁稚との相撲や木登りなど体を動かすことや、男兄弟がする学問に興味を持ち、「四書」を襖の陰で聞き、書物を読むような子どもだったと言われています。

浅子が生まれ育った頃の生家の商売の様子について『三井事業史 本編第一巻』（1980年刊）によると、幕末の政情不安と物価騰貴の世情の中、例外なく苦境に陥っていたようです。その後、三井家は明治維新を経て新政府と財政面での関係を築くことに成功し大きな飛躍をとげます。

浅子は、加島屋に嫁いだ後も人脈、資金面などで生家と深い関係を築き、様々な事業を展開していく上で大きな力になりました。

【事業家としての浅子評】

『大同生命七十年史』（1973年刊）は、事業家としての浅子について、「いまだ男尊女卑の思想が国中に浸透していた封建的な明治の時代に、女性の身で事業経営に敢然として立ち向かった広岡浅子は、財界の激流にも流されず、男もおよばぬほどの気概を示し、名家の面目をみごとに維持発展させた紅一点として、広岡家の歴史に異彩を放っている。」とし、

（裏面につづく）

「あさが来た」社史にみる広岡浅子

(1面からつづく)

「20歳のとき、維新の動乱が起り、広岡家の家運はにわか傾いた。豪氣、英明な天性に恵まれた浅子は奮然として立ち上がり、傾く家運のばん回をはかった。みずから鉱山や銀行の経営にあたり、あるときは坑内にくぐって、荒くれた坑夫らと起き伏しをともし、そのため常に護身用のピストルを離さなかったという。また、計数の知識も豊かで、男子に率先してその卓越した才腕を銀行経営にふるった。」

「男もためらうような冒険的事業にあえて乗りだしたので、狂気扱いにされたこともたびたびであったという。浅子は徹頭徹尾男まさりのタイプで、その大柄なからだを洋装でかざり、縦横無尽に活躍する姿は、まさしく明治の大阪財界ならびに婦人界で注目された女丈夫(じょじょうふ)であった。」などと評しています。

【炭鉱事業で資金を得る】

浅子が、自ら経営にあたったとされる鉱山は、潤野(うるの)炭鉱と呼ばれ、現在の福岡県飯塚市に位置していました。加島屋は1884年頃から炭鉱事業を始め、紆余曲折の末、炭鉱の再開発に成功します。

その後、事業は1899年に潤野炭鉱を含む周辺の炭鉱が、官営八幡製鉄所の燃料供給地として国に買い上げられ、二瀬炭鉱となるまで続きました。

のちに、炭鉱を所有した日鉄鉱業の『創立拾年史』(1949年刊)には、二瀬炭鉱の写真が見開きで掲載されており、炭鉱の面影がうかがえます。

また、同社『四十年史』(1979年刊)には、潤野炭鉱の買収交渉について記載され、所有者として浅子の夫である広岡信五郎の名前が登場します。

【浅子の夫・広岡信五郎】

広岡信五郎は、謡や茶の湯に親しむ教養人で、それは大阪商人の嗜みでもありました。そんな仲間内からビジネスの相談が始まり、信五郎が最大出資者として参加し、1889年、初代社長に就任したのが、尼崎紡績(現、ユニチカ)です。

『ユニチカ百年史 上巻』(1991年刊)には、尼崎紡績設立の経緯と共に信五郎について、「大阪屈指の分限者(財産家)。早くから独立して広岡商店を興し絹布を営業、別に加島銀行を創立した。当社の初代

社長。」と写真と共に紹介されています。また、『大日本紡績株式會社五十年記要』(1941年刊)には「尼崎紡績會社創立御願」の複製が付いており、信五郎の筆跡を見ることができます。

さらに信五郎を含む尼崎紡績を始めとした4社の首脳陣などの発起人を得て、紡績業の原料となる綿花の直輸入会社の設立に向けて動き出し、1892年に設立されたのが、日本綿花(現、双日)です。『ニチメン100年』(1994年刊)より)

その他、大阪取引所の取締役就任するなど、信五郎は大阪の財界人として活躍しました。

【加島銀行の設立】

江戸時代から両替店を家業としてきた加島屋ですが、炭鉱事業などで得た資金をもとに、1888年、大阪市中央区を本店とした加島銀行を創立し、近代的金融機関へと脱皮します。浅子の義弟の広岡久右衛門正秋が初代社長を務め、浅子も大きな貢献をしたとされています。

加島銀行は『大同生命七十年史』によ

ると「大正15年1月現在、公称資本金3020万円で、大阪市に本店を置く15の銀行のうち、住友、三十四、山口につぐ大銀行であった。」と記述されており、他行とともに関西の経済・産業界を支える役割を担っていました。

ところが昭和初期の金融恐慌により、「業績は急激に悪化し、休業こそは免れたものの、早晚整理を必要とする情勢に追い込まれ」、事業の整理・譲渡を余儀なくされます。整理の様子については、「川崎第一銀行（現、三菱東京UFJ銀行）、第一合同銀行（現、中国銀行）の2行に対し、東京市内、岡山市内、広島、福山、徳山、岡山県郡部の大部分の支店を譲渡した。さらに、2次整理を実施し、日本興業銀行に名古屋支店の営業いっさいを譲渡した。」とあります。（いずれも『大同生命七十年史』より）

さらに『大和銀行七十年史』（1988年刊）によると、1929年の「第3次の最終整理では、大和銀行（現、りそな銀行）の前身である野村銀行が、大阪を中心に東京など合わせて14支店、14出張所を引き継ぎ、山口銀行、鴻池銀行（のちに両行は合併し三和銀行等を経て、現、三菱東京

UFJ銀行）が合わせて15支店6出張所を引き継いだ。」とあることから、関西圏のみならず、関東から関西以西にまで進出する有力銀行であったことがわかります。廃業時の整理により、各行に多くの店舗と人材が継承されました。

この頃になると、浅子の娘婿である広岡恵三が第二代社長を務めていました。整理時の様子については『大同生命七十年史』に「加島銀行の整理にあたって、広岡社長は、損失をすべて広岡一門で負担し、預金者はもちろん他の株主や債権者には、なんら迷惑をかけない根本方針をつらぬいた。」「加島銀行の整理による累を大同生命に及ぼさぬように日夜苦心を重ねた」と記載されています。

【大同生命の設立】

1895年、広岡家に真宗生命から再建話を持ち掛けられます。真宗生命は、2万を超える真宗寺院、200万戸の信徒を基盤とし発足しましたが、一宗派を背景に発足したことで逆に募集市場を狭めたこと、募集競争が激しくなり、いたずらに拡張を焦って新契約の獲得に狂奔したことなどで、衰退する社運の自力挽回はすでに不可能な情勢になっていました。

以下、『大同生命七十年史』からの要約・引用を続けます。

「生命保険事業の性質上、社会的信用の回復こそ最も先決の問題として、当時大阪財界で、その財力、声望ともに有数の名門であり、しかも本願寺の門徒総代格でもあった広岡家の助力を求めることに衆議一決し（中略）同社再建の可能性を説いて、その救済を懇請した。」

救済の要請を受けて広岡家では、「生命保険事業が他の一般営利事業と異なり、相互扶助の精神を基調とする社会公益のための事業であることに強く心を動かされ」経営を引き継ぎ、真宗生命は、朝日生命として再スタートを切りました。

その後、1902年、朝日生命が主体となり、東京の護国生命、北海道の北海生命との合併により設立されたのが大同生命です。

三社合併の責任者で、大同生命設立の立役者である中川小十郎（のちに台湾銀行頭取、立命館大学初代総長。創立資金は、加島銀行と朝日生命により無担保で融通。）、若くして第二代社長となった広岡恵三を支える星野行則、祇園清次郎は、

(3面から続く)

いずれも浅子の知遇を得た人物であり、有能な人材を見抜く確かな目を持つていたことがわかります。

大同生命が発展していく上で、最も大きな役割を担ったのは広岡恵三です。恵三は、元播州小野藩主の一柳家に生まれ、浅子・信五郎夫妻の娘婿となりました。その活躍は大同生命にとどまらず、広岡家の事業全般に及びました。1909年に第二代社長に就任して以来、1942年まで三十三年の長きにわたり大同生命の社長を務め、有力生保に育てあげました。

『大同生命100年の挑戦と創造』(2003年刊)には、恵三の経営の特色として「生命保険会社としての公共的使命を果たすには、株式を分散せず、広岡家に集中しておくべき」という理念を挙げ、その考えは「利益の大部分を加入者に提供し、その残りも株主の占有とせず、代理店・従業員に分配したことにも現れている」と紹介されています。

恵三はほかにも、大分銀行頭取(1922年、大分銀行が反動恐慌により休業状態に陥った際に、加島銀行が再建に協力)、奈良軌道(現、近畿日本鉄道)の初代社長を務めるなど幅広い分野で足跡を残しました。『大分銀行120年史』(2014年刊)、『近畿日本鉄道100年のあゆみ』(2010年刊)より。

広岡家は、1953年まで四代にわたり大同生命の社長職を務め、大同生命は現在まで百年以上に亘り事業を継続しています。

○ 浅子は、手掛けた事業が軌道に乗り、夫・信五郎の没後、娘婿の恵三が家督を継いだのを見届けたのち、成瀬仁蔵らと日本女子大学を創立するなど女子教育に力を注ぎました。

63歳で洗礼をうけた浅子は信仰活動にも強い意欲をみせ、大阪はもとより関東から北海道まで伝道の足をのばすこともあつたということです。

○ 晩年には常々「私は遺言はしない。平常いうことがみな遺言である」と漏らして悟りの境地に入っていた、と『大同生命七十年史』に記されています。

様々な社史を辿ってみると、実業界における広岡家の活躍を感じることができ、それが多岐に渡ることに驚かされました。

現在、発行されている社史の記載に、表立って広岡浅子の名前が見られることはそう多くはありませんでしたが、その存在が「あさが来た」で、クローズアップされたことで、おそらくこれから刊行される各社の社史では詳しく取り上げられるのではないのでしょうか。

このように、過去に新たな光が当たり、通史に新しい風が吹き込まれて内容が変化してゆくというのも社史の醍醐味の一つなのかもしれません。関係各社の新しい社史を楽しみに待つことにしたいと思います。

(科学情報課 青山)

※記載の一部は、大同生命のホームページを参考にさせていただきました。

●お問い合わせ先 神奈川県立川崎図書館 科学情報課

〒210-0011 川崎市川崎区富士見2-1-4 電話：044-233-4537

<http://www.klnet.pref.kanagawa.jp/kawasaki/index.html>